巻頭言

明日の自分を描く

財団法人日本公定書協会名誉会長
内山　充
MITSURU UCHIYAMA
Society of Japanese Pharmacopoeia

【経歴】
昭和28(1953)年東京大学医学部薬学科卒業。同大学院博士課程を修了後，東北大学へ赴任。昭和43(1968)年より東北大学薬学部教授(衛生化学担当)。昭和49(1974)年国立衛生試験所に出向，食品部長，薬品部長，副所長を経て，平成3(1991)年より所長，平成7(1995)年3月退職。その後，日本薬剤師研修センター理事長，平成16(2004)年7月より薬剤師認定制度認証機構理事長，その間，平成7(1995)年7月より平成12(2000)年6月まで，および平成15年(2003)年7月より平成18(2006)年6月まで日本公定書協会会長。

昨年11月に米国では，バラク・オバマ氏が黒人初の大統領として選出され，本年1月20日には第44代の大統領に就任する。彼は一貫して「変革」を旗印にして当選した。グローバル化が進んでいる現代では，世界中の人々がこのことによって，今後の社会にはいろいろな意味で「変化」が必然であるということを改めて痛感したのではなかろうか。

われわれの周辺にも，変化の必要な課題が数多くあることには誰もが気付いている。われわれは，保健，医療，福祉の場をはじめ，多くの人々から寄せられるさまざまな要望を感知して，医薬品等の開発を通じてそれに応えなければならない。そして，人々のQOL向上に貢献し，より良く新しい社会を創り出すように努めたい。

より良い社会を創り出すには，法規や制度の整備も必要ではあるが，あくまでも主役は「人」である。しかし，必ずしも独りで大きなことをしようと思う必要はない。自分にできること，関心のあること，そしてしなければならないことなど，目標を見定めて，身の丈に合った働きをすることである。ただし，「行動の拠りどころは自分の中にしかない(ゲーテ)」といわれるように，自分の社会的働きの拠りどころを自分自身で作らなければならない。トインビーは「国家も文化も自己決定能力の喪失とともに滅びる」といっているが，これは個人についてもいえるのであって，「明日の自分をどう作るか」を自ら決定することが大切なのである。

1 明日の自分に具備したいもの

明日の自分といっても，架空の姿を描けばよいということではない。毎日行っている業務にはそれぞれ目的がある。その目的に沿って社会に何らかの貢献をするためには，まずそれに相応しい資質を自ら備えなければならない。目まぐるしく変化する環境と，日進月歩の科学技術に即応した資質形成には，いろいろな形で生涯を通じた学習が必要であることはいうまでもない。21世紀は知識社会といわれるが，知識社会では，「働くことは学ぶこと」であり，学びの無い働き方は働いていないのに等しい。

ただし，学習といっても，教わる，覚えるということだけではない。学びの基本として，自分で考える時間的余裕を持つことも忘れてはならない。その余裕が，自分独自のアイディアや，自分にしかない能力を生み出すのに必要だからである。

1)能力：生涯学習によって高めるべき資質とは何か，というと，当然のことながら，学習によって得られる知識と技術が挙げられる。身についた知識や技術が職能(専門職としての能力)を向上させるのに役立つからである，しかし，能力は，単に知識や技術の広さと深さで表わされるものではない。多くのことを知っているということではなくて，それに基づいた，具体的な行動によって実践できる力が真の能力である。実践的な行為というものは，本来意識や解釈によって行われるのではなく，ほとんどが無意識の動作として行なわれる。そのような状態では，知識や技術は「知恵」になったといえる。知恵として身についた能力が，望ましい資質であろう。

しかし学習は「能力」を高めることだけ，と考えてはいけない。「能力」とともに「理念」と「人格」を磨くことも忘れてはならない。

2)理念：「理念」とは，ことの本質を捉える思考の形である。自分の人間としての社会活動の本質的目標を，いつもはっきりと把握することにより，それが自分の言葉で語られ，意味を持つものとして存在することが肝要である。個人でも組織でも，その理念は，常に外に向けて明らかにされていなければならない。理念の欠如した人，あるいは組織は，何を考えているのかがわからず，意思のはっきりしない，顔の見えない存在としかみなされない。

本誌読者の日常の理念としては「患者主体の医療／医薬の発展に貢献できて，しかも社会全体の理解と共感を得ることのできるような業務の構築」ではなかろうか，と考えるが，「定義には，それを読む人に例外や矛盾を探させる衝動をもたらす妙な性質がある(香西秀信)」というから，理念は自分で作る必要がある。いつでも筋の通った理念を表現できることは，自分を作る上での基本である。

3)人格：「人格」は日常行為を決める主体である。自分の中にあるものを拠りどころとしての行動が，「専門職業人の倫理」に則った行動であるときに，高い人格と評価される。

専門職業人としての倫理とは，道徳とか人間愛とか個の尊重とかいうような，人としての基本的な倫理観に加えて，専門的職業上で遭遇するあらゆる場面において，最善の判断基準をもって，正しい評価に基づく最適な行動が取れることをいう。最も適切な判断を下して，それを行動に移すことのできるような，評価能力と実行力を備えていることを意味する。そしてこの「人格」は，先に述べた生涯学習によって得た豊かな知識・技術から生まれた「知恵」によって裏付けられるものであり，人間として最終的に具備したい資質ということができよう。

2 明日に描く展開

上に述べたような，望ましい資質は，多くの実践的行動を伴いつつ形成される。社会に必要な「変化」の実現に貢献できる「明日の自分」は，新しい価値を目指した「業務目標」を見出すことが大切である。それにより，常に心に希望を持ち，いたずらに老いることなく活力を保つことができるからである。新しい目標を見出す手がかりは，日々の業務の中にもある。業務を通じて得られた新しい理解や知識が，自分なりの着想や疑問を生み，それらの実現や解決に向かっての業務の新しい展開や，思いがけない発見に繋がる可能性もある。

そのとき留意したいことは，既存の固定概念を脱して問題を発見し，挑戦する努力を惜しまないことである。問題発見の糸口はいくつもあるが，身近な，しかも実現の可能性の高いものとして「分野の拡張」と「介入の行動」がある。

分野の拡張とは，自分の業務分野が固定されていると考えず，新しい業務分野を拓く試みである。社会環境や生活構造の変化により日々新しい多様なニーズが発生している。それをいち早く感知し捉えることで，新しい業務が展開できることが最も望ましい。周辺の分野の業務変化に呼応して，従来と異なる分野を開拓するのも一つの方法である。

介入の行動とは，自分の業務の枠を超えた行為を行う試みである。業務上の行為には，法令や規則で決められたもの以外にも，組織内の申し合わせや前例に基づく権限の範囲が決まっているものが多い。しかし，はっきりした大義名分がある場合には，権限範囲と思われていたものを超えるような行為を行うことを躊躇してはならない。むしろ進んで介入することで将来の業務の発展を目指すべきである。

おわりに

今日の業務をそのまま明日も続ければよい，という時代ではなくなってきた。日常の働きの中で，常に学ぶことを忘れてはならない。知識社会に生きる者として，理念，人格，能力を伴った資質向上の責任は，あくまでも自分にある。また，問題の原因と解決の責任は他にあって自分にはない，と考えてはならない。一人ひとりが，自覚をもって社会と人間のために役立つ「明日の自分」を目指してほしい。